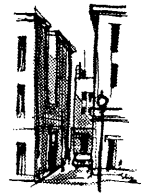


ヨーロッパの旅 (四)

ストックホルムを飛び立った飛行機は、ロンドンをめがけて南下していく。ちょうど、スエーデンという南北に細長い国を縦断することになる。窓からまじまじと見下ろしていると、大小の湖が至るところに入り組んでおり、その周囲にはうっそうとした森が続いている。その中に、赤や青の屋根が点々と見える。湖に張り出したような家もある。あのようなところに住んでみたい――

実は、思春期以後に育った一つの夢は、湖畔で静かに暮してみたいということであった。沈んだような青さの水面をわたる風に、ひたひたと音を立てている――その音を、いくつかの日本の湖できいた。その音は、私の心の奥まで洗ってくれるような音であった。その音を、野尻湖畔の一軒家で、ドイツ人の年老いた婦人といっしょにきいた。宍道湖畔の宿屋で、漁火が点滅するのを見ながら、その音にきき入って、夜の更けるのも忘れた日のこと

平井信義



を思い出す。また、葛沼のほとりの浅瀬に足をひたしながら、ひたひたと寄せてくる水のすがすがしさを肌で感じとったこともある。

葛沼で何日かを送った頃、それは大学生の頃であったが、私は一人の女の子に深く思いを寄せていた。その女の子は、ようやく思春期にかかる頃で、まだまだあどけなさいっぱいの子どもであった。よく、その子を膝の上に抱いて、童話の本を読んでもあげたり、かくれんぼなどをして遊んだりした。すなおで、心根のやさしい子どもであった。その子も私が好きであった。私を「お兄さま」と呼んで慕っていた。手をひいて散歩にもでかけた。

いつの日であったか、その子が私の膝に向かい合わせにすわり、私はその子の手を握りながら、ゆっくりしたりズムをとって、シーソーのようにからだを動かしていた。何回かそのようなことをしているうちに、その子がびたっとからだをとめ、私の目

をじっと見詰めた。そのまなざしは、真剣そのものであった。私のまなざしを押しやるように、心の中に入ってきた。その時、私の口から、「ぼくのおよめさんになってくれるかしら？」という言葉がほとぼり出た。はっとした表情でその言葉を迎えた女子は、私の心を汲みとるように、更に一瞬私の目を見詰めたが、たちまちはずかしそうにうつむきながら、軽くうなずき、再びシーソーのようにからだを動かし始めた。

それ以来、女の子と私との間には可愛い文通が一週間に一回ぐらゐの割合いで、数年間続いた。葛沼の思い出は、二人のつき合の三年目であった。私は、その女の子と二人でこの沼に来る日のことを考えていたのであった。しかし、戦争が、遂に二人の間を遮ってしまった。

このような思い出の中の私をのせて、飛行機はひと息にスエーデンの空を飛んでいく。見下ろされているたくさんの湖沼は青黒く光り、じっと人を待っているような風情であったが、その一つが、あのひたひたという音を立てているのであろうか？

オランダの海岸線を何十分か飛んだあと、ドーバー海峡にかかると、遙かに大きな雲のかたまりが目に入った。その下にイギリス本島があるはずであるが、厚い雲の層は、ほとんど鳥影をかくしていた。

ドーバー海峡をじっと見下ろしていると、白い波の尾をひい

て、何隻かの船が見える。ちょうど十五年前に、この海峡をベルギーのオストエンドからロンドンに向けて渡ったのであった。その日は晴れていたが、風の強い日であった。港を出てしばらくすると、船の動揺は著しくなった。右にかしぎ、左にかしぎ、前にもたれ、後に倒れる——そのような動揺の中で、乗客は次々と船酔いに倒れ始めた。家族が一群となり、夫婦がもたれ合い、ベンチや椅子で生気を失っていた。私も、船には弱い。しかし、一人旅の私には、介抱をしてくれるものがない。船酔いにおちこみそうになる気持をひき立てひき立て、船首へいつてみたり、船尾へいつてみたりした。ロンドン港の到着が六時頃であったのに、日がとっぷりと暮れても、港につくようすがない。右や左に、前や後にゆれながら、エンジンの音は同じ調子が続けている。私はたまりかねて、近くの乗客に、「船はいつ着くのでしょうか？」ときいてみた。

「荒れていて、港につくことができないらしい。ロンドンの湾内にははいつているのだが——」という答えであった。初めてのロンドンであるので、真夜中になったら、どのようにしてホテルまでたどりついたらいいかわからない。どうしたらよいだろうか？と思ってみるが、船はいつこうに着くようすがない。時々、遠くにちらちらとあかりが見え、それがロンドンの町らしいが、再び闇の中へ入ってしまう。たしかに湾内をぐるぐると廻っているようすであった。船員がロープを肩にかけてやってきたので、何

時頃に着くのでしょうかときいてみた。しかし、その答えは「船長だけが知っている」というまことに愛想のないものであった。すこし離れたところの乗客も、私と同じような質問をしたらしいが、同じ答えしか返ってこなかった。

このような時、わが国であつたら、乗客が騒ぎ出すのではなからうか？「いつ着くのかはつきりさせろ」「船長、でてこい！」「早く何とかしろ！」など、憤りを爆発させる者があるにちがいない。しかも、船員の答えた「船長だけが知っている」などの言葉は、人々の感情を刺激して、あるいはつかみかかる者が現われるかも知れない。しかし、この船には、誰もそのようなことをするものがなかった。ひたすらに船長を信じて、身をまかせている——といった状態が汲みとれた。考えてみれば、船長の気持は、少しでも早く安全に乗客を港にまで運ぶけんめいな努力をしているはずである。その善意を信じ、風の状態が変わるのをじっと待っているべきであつた。船は遂に真夜中の二時になって港にいたのであつたが、その間、乗客は船酔いに苦しみながらも、恐らく内心は不安をもっていたことであろうが、ひと言も船員に文句をいわなかった。この事実をどのように考えるべきか、その後、長い間、考え続けていたが、今回飛行機でドーバー海峡をひと飛びに飛びながら、再び思い返されたことである。

飛行機は、海峡の半ばあたりからしばらく雲の上を飛び続けた後、霧の中に突入し、雫を小さな窓にうけたが、やがて視野がひ

らけると、ロンドンの市街が見えた。テムズ河がうねうねと流れ、それに沿って目を移すと、なつかしいウエストミンスター寺院や国会議事堂が見えた。

実は、ロンドンという町は、私にとっては好感が持てない点を、初めに述べておく必要がある。十五年前に來た時も、五年前に來た時も、同じ感じを持った。何となく、人を見くだしたような感じの人がいることが好感の持てないことの一つの理由になっている。その印象は、あるいは、中学の頃に会話をならつたイギリス人の教師の印象に結びついているのかも知れない。その人は、生徒たちに英語の名前——たとえば、トムとかジョンなどの名前をつけて呼んだ。本当の名前があるのになあ——とわれわれは憤慨したものである。その教師に道で会ってあいさつをして、愛想がなかった。そんな時、いやなやつだなあ——と思うことがしばしばあつた。それが、イギリス人に好感を持てないことの原因となつているとすれば、あまりに主観的すぎるかも知れないが、ロンドンにいる友人たちに会って話をきいた時にも、階級の区別の厳しきなどについて、たとえば、レストランにも何等級があつて、一々二等級のものには入れないのだなどときくと、やはり必ずしも主観ばかりでないという気がするのであつた。そのような気持で衛兵交替などを見ていると、全くのコメディのような気がして、衛兵がまじめな顔をすればするほど、思わずふき出したくなつたし、英国銀行の脇をシルクハットに山高帽をかぶ

ったいわゆる英国紳士が歩いていくのを見ると、ちょっといたずらをしてやりたい気にもなるのであった。そのようなことでこれまでの四回のヨーロッパの旅のうち、二回はイギリスを避けたのである。

今回のロンドンの訪問は、ひたすらに自閉症の研究のためであった。いくつかの出版物によって、ウィング博士夫妻の努力で、自閉症児のための教育と福祉とがよく実現されているらしいことを知って、その活動をつぶさに自分の目でみるとともに、重要な問題について討論をしたいと願っていた。出発に先立ちわが国にあるブリティッシュカウンシルを通じて、「モズレー病院」との連絡をとってもらい、その旨を伝えておいてもらった。もちろん、承知する旨の回答を得たので、今回のヨーロッパの旅の中で最もみりの多いものとなることを予想し、勇躍してロンドンに渡ったのであった。

ロンドンのホテルにつくと、早速ブリティッシュカウンシルからの手紙があり、先ず事務所へ来るように時間が指定してあった。翌朝、その事務所へいってみると、あっちへいけ、こっちへいけ——といわれた上に、大分待たされて、事務員の女の人と会ったのである。ところが、その女の人から、モズレー病院ではあなたを案内するにふさわしい人が三人も休暇をとっていて、案内ができないので、次の機会にしてほしいと病院からいってきたと、伝えられた。せっかくロンドン（くんだり）まで来たのだから、

ぜひ見学だけでもさせて欲しいと懇願した。それをきいて女の人はもう一度交渉してみると、その返事はホテルの方へ送っておくということであったので、午前中いっぱいを無駄に送ってしまったことを歎きながら、午後を観光とした。夕方、ホテルにつくと、手紙が来ていた。見ると、結果は同じであり、最後に、次回にはぜひ立寄ってほしいと書かれていたのである。次回って、いつのことをいうのか！ 承諾があったから、遠路をロンドンに来たのに、次の機会と云って、そう簡単に来れるものではない——と思うと、腹が立ってきた。何ということだ！

そうなると、次々と腹が立つ。第一ホテルのサービスたるや、全くできていない。サービスではなく、管理に等しい。部屋の鍵の授受をするおじいさんがいて、外出から帰ってくると、そこで宿泊証を示して、その人から鍵をもらわなければならない。立てこむと、四五人の列を作るようになるのだが、私が間違っただトドを横にして出したら、いやな顔をして、「ネックスト（次の人）」といったのである。私をあどまわしにして、次の人を先にしたとは！ 次の人が女性であれば我慢をしたかも知れないが、若い男性であった。何ということか！

朝の食堂も、ボーイ長が日々支配した。一列に並び、ボーイ長の命ずる席へいってすわらなければならず、料理を運んでくるのも実に遅い。時間で外出しなければならない外人が、急いで食事を運んでくれるように頼んだが、肩をすくめてできないという。

そのような人が二人もいて、怒ったような顔をして、一人は食事をせずに、一人は時計を何回も見ながら、とうとうスープだけなので、あたふたと出ていってしまった。それでも、朝食はホテル代の中にふくまれているのである。サービスとは全くほど遠いものであり、一体どうしてこのような支配的な人間ができあがるのか、あきれた——というよりほかはない。このようなところにイギリス人の特性をみってしまうのは、偏見であろうか。第一回にロンドンに来た時はチバという製薬会社の小さい宿泊施設に無料で一〇日ほど泊めてもらったし、第二回の際にはパンションであった。ホテル住いは今回が初めてである。旅行案内にも二流どころのホテルとして紹介されているのに、このような状態であるとすると、三流や四流のホテルは推して知るべし、ということになるのか、あるいはこのホテルのみがあきれた状態にあるのか——。

ホテルを一步でるとピカデリーサーカスに直面する。ここで私はビートルズとよばれる群を初めて見ることができたのは幸いであつた。新聞や雑誌などでその存在や姿態は知っていたが、目の前につぶさに見るのは初めてであつた。それ故、日本のビートルズも見たことがない。中央にある銅の碑をめぐって四〜五段の階段があるが、そこにぎっしりと詰まって腰をおろし、話をし合っている者もあれば、楽器をならしている者もあり、うつろな目で宙をみている者があり、生き生きと目を輝かしている者があり、その着ているもの、また異様であることは、一口では言い現わすこ

とができない。髪は長くたらしめて、男性とも女性とも区別のない者もあるが、わざわざ頭をきれいに刺ってはげを作っているものもあり、赤ん坊を抱いている女性もいた。この雑踏の中に、子どもをどうして連れてくるのだろう、誰の子なのだろう、この子が大きくなったら、どのようになるのだろうか——いろいろの思いが湧く。一日二回、市の清掃係の一人が来て、ホースで水をかけ、そのあたりを掃除する。その時ばかりは腰を下ろしてられないので、三々五々と散っていく。しかし、石が乾いてくる頃になると、どこからともなく現われてきて、同じようにビートルズの群ができるのであつた。

このような大群のビートルズを、ヨーロッパのほかの国々でみたことがない。一昨年パリーのセーヌ河畔で幾組かの少数の集団を高みからみたが、このピカデリーサーカスの人数は、非常なものであつた。いったい、どうしてこの土地に、このような者が集まってくるのであろうか——。紳士の国といわれていることに何か関係があるだろうか。恐らくいろいろと心理学者や社会学者による分析が行なわれているのであろうが、初めてこのような集団をヨーロッパの一隅で、しかもロンドンで見たとすることは、私にとつては非常な驚きでもあり、興味でもあり、たまたまホテルのすぐ前ということもあって、飽きずに見ることになった。

もう一つ、私が驚いたことは、このロンドンが、超ミニスカートの女性が多いということであつた。